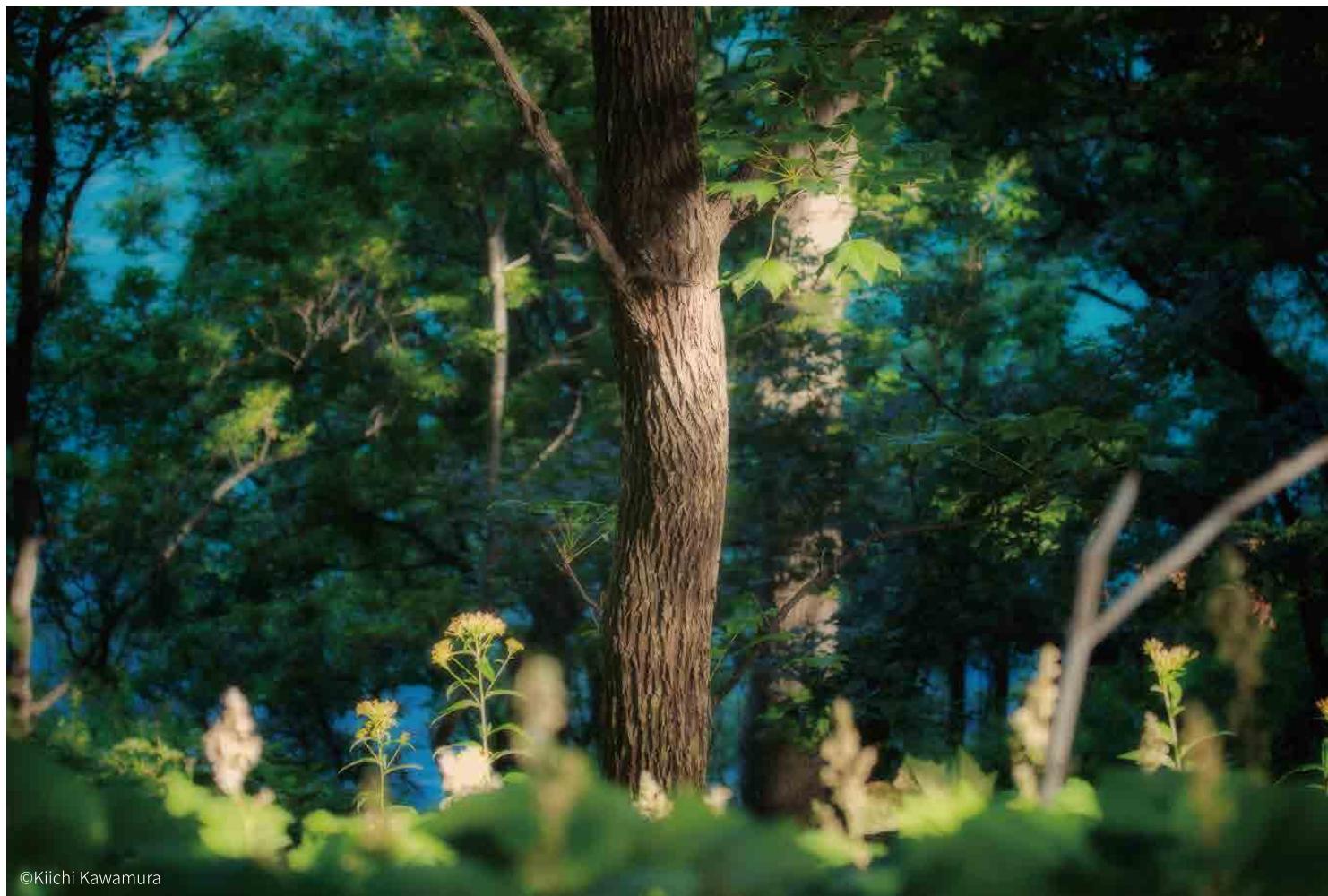


いのちあふれる森を次世代へ

しれとこの 森通信

しれとこ100平方メートル運動 40周年特別号

2018
No. 21



©Kiichi Kawamura

P2

森づくり百年の計
辰濃和男さん

P6

100平方メートル運動の森づくり
これまでとこれからの20年

P20

100平方メートル運動の可能性
石川幸男さん(弘前大学白神自然環境研究所教授)

National trust 100 of Movement Forest Trust

100平方メートル

運動の

森林
トラスト

森づくり百年の計

知床の運動は、一九九七（平成九）年を境にして大きく変わった。簡単にいうと「夢を買う運動」から「夢を育てる運動」への発展である。

第一の期間は、一九九七年からはじまつた「しれとこで夢を育てませんか」の運動で、これは、これから町長の提唱ではじまつた「しれとこで夢を買いませんか」の運動だ。人びとに一口八千円で夢を買ってもらい、確保した運動地を原生林に戻すという仕事を進めてこの運動で、土地が確保された。

第二の期間は、一九九七年からはじまつた「しれとこで夢を育てませんか」の運動で、これは、これからもずっと続く。人びとに一口五千円の寄金をあおぎ、確保した運動地を原生林に戻すという仕事を進めている。

運動の名前も「知床 100 平方メートル運動」から新しく「100 平方メートル運動の森・トラスト」に変えた。全国のみなさんに寄金をいただき、運動地を原生林に戻す仕事はまだまだ続いている。

原始の森を復元するといつたて、ここは北緯四十四度以北の寒冷の地だ。大雪もある。強風も吹く。加えて、エゾシカ対策の重圧もある。「原始の森」が簡単に生まれるはずはない。長い歳月をかけて二歩二歩、大地を踏みしめて進まなければならない。人手もいる。経費もかかる。とても一つの町の力でできる仕事ではない。

斜里町という小さな町の背後にはしかし、大きな力があり、それが小さな町の仕事を支えてきた。「大きな力」というのは、全国にいる市井の人びとの、何万もの人の力が寄り集まって生まれたものだ。全国の力がないでもなかつた。

人びとの協力なしには、原生林を復元するという大仕事は成功しない。
いままで「原生林を造る」とか「原始の森を復元する」とかいう言葉を自分で使いながら、心の中ではもやもやするものがあった。

完全な原生林といふものは、一切、人の手が加わっていない状態の森をいふのだとすれば、「一本一本の苗を人の手で植えることもある仕事、その仕事から生まれてくる森を「原生林」といつていいものかどうかという疑問がないでもなかつた。

しかし、人びとがきわめて注意深く、慎ましく、あせらず、しかも自然への深い畏敬の念を抱きながら作業を進める場合、そこには、限りなく原生林に近い状態の森が生まれてくる可能性は十分にある。そして、もし「限りなく原生林に近い森」がここに現れるとすれば、この「知床の実験」はみごとに成功したことになる、と思うよくなつた。

「人の手が加わった再生原生林」は、人間にも「自然に学ぶ力」が備わっていることを証明するという意味で、よりいっそう貴重な世界遺産になるはずだ。何百年後、国内外からこの地を訪ねてくる未来の人たちに向かつて、そのころ知床に住んでいる人びとは、胸を張つてこういふだろう。

「これが、二十世紀の七〇年代から始まつた運動の成果です。私たちの先達は、『原生の森の再生』を合言葉にして、古くて新しく、新しくて古い生命体を再生させる夢をなしどげたのです」

『よみがえれ知床 100 平方メートル運動の夢』
辰濃和男編著（朝日新書）から

元朝日新聞論説委員の辰濃和男（たつの・かずお）氏は、2017年12月6日逝去されました。

氏が、天声人語にはじめて 100 平方メートル運動を紹介してから、40 年の月日が経ちました。その間に、北の小さな町で起こつたこの運動は、大地に根を張り、今も全国に向かつて枝を伸ばし続け、種子を落としています。その種子は、極寒の地で育つ木々のように、ゆっくりではありますがたくましく成長し、いつか大きな森を成すはずです。

この夢の森のきっかけは、氏が文章に託した、自然を愛する想いでした。私たちは、この想いを受け継ぎ、次の世代へと伝えていきます。氏のご冥福を心からお祈り申し上げます。

【しづとこ100平方メートル運動の40年】

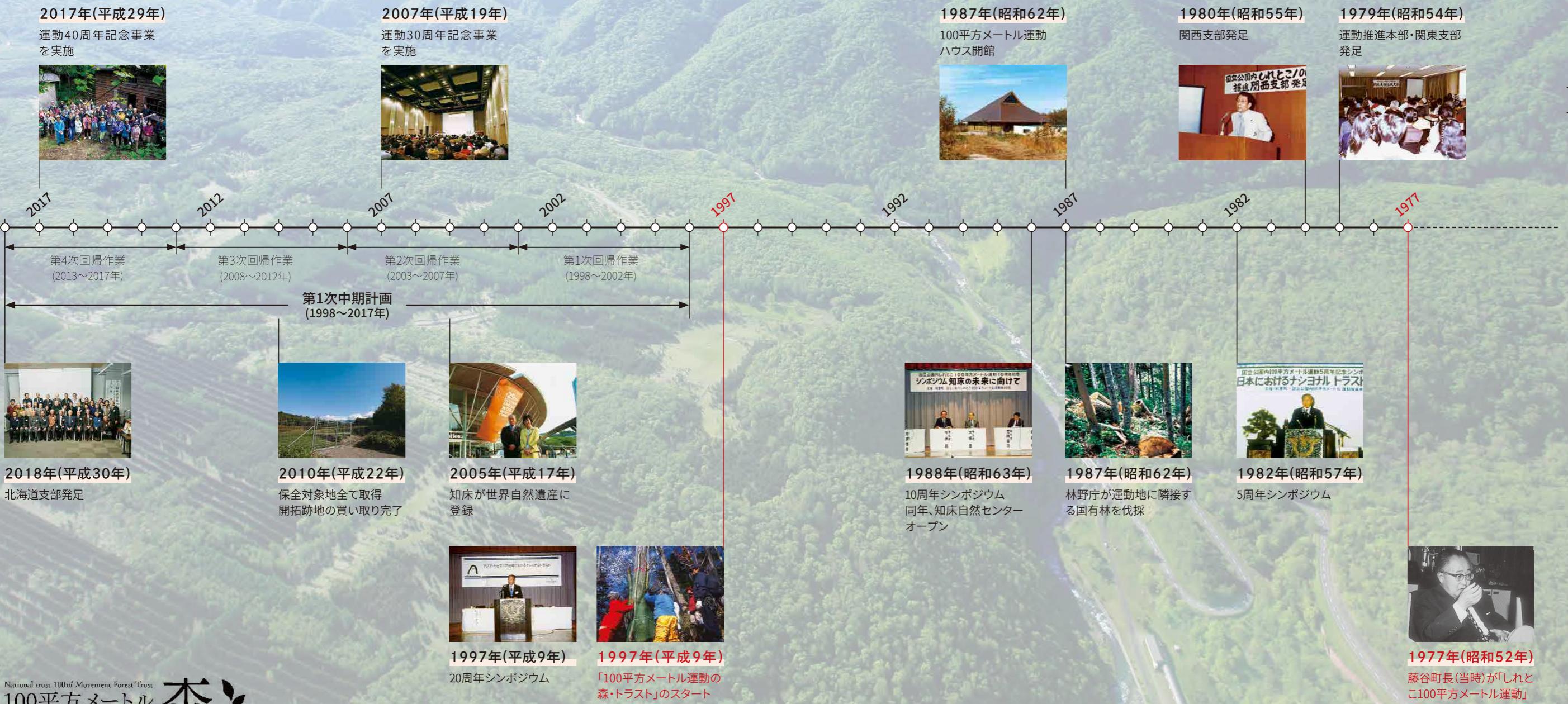
しづとこ100平方メートル運動開始から40年が経過しました。最初の20年は土地の取得に注力し、次の20年は増えすぎたエゾシカから樹を守りつつ、地道に森林面積と樹高を伸ばしてまいりました。途中、多くの広葉樹が失われましたが、樹皮保護ネットや防鹿柵によって母樹は残されています。エゾシカの影響が減ったため、これからは、運動では森が本来の回復力を取り戻す手助けをします。

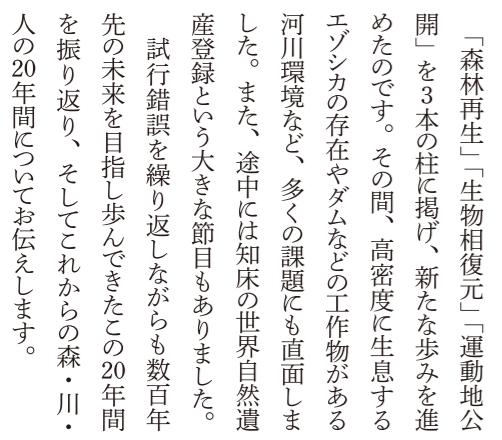
私は、漁師の先輩である藤谷町長はじめ、歴代の町長から受け継いできた『緑のバトン』を未来引き継いでまいります。これからも皆様方のご支援のもと、着実に進めてまいりますので、引き続き運動へのご協力をお願い申し上げます。



斜里町長
馬場 隆

100平方メートル運動の森・トラスト 不変の原則	
1. 植林木の生長によって余剰の樹木が生じても、運動地の系外への人為的な持ち出しあるは認めない。これは自然の営みから生産される物質は、すべて運動地内でリサイクルさせること、経済的利用は認めないと意味します。	1997年策定
2. 自然に再生しつつある二次林では、森づくりのためであっても、大規模な森林構造の急変は行わない。森の再生過程を助ける程度に留める。複雑な森林生態系の中では、人が良かれと思ってやったことが、森の成り立ちを壊してしまう恐れが絶対ないとはいいきれません。それを防ぐために、謙虚に弱度の働きかけをじっくり行うことを意味します。	
3. 再生計画の実施にあたっては、国立公園および自然教育の場としての位置づけに配慮した森づくりを進めます。	
4. 5年一巡の回帰作業方式をとること。過去の作業結果を評価するモニタリング調査を欠かさない。常に後ろを振り返りつつ、自然に対して謙虚な作業を行っていきます。	
5. 作業計画の立案や見直しは、定期的に開催する専門委員会議に諮り、承認を得なければならない。恣意的な変更は認められません。	
6. 野生生物とその営みの再生にあたっては、遺伝子汚染を防ぐこと。つまり、減少種の他地域からの安易な導入は行わず、現地の個体群からの増殖を原則とします。また、絶滅種の復元では、遺伝的にも地理的にも極力近い個体群からの再導入を原則とします。	





試行錯誤を繰り返しながらも数百年の未来を目指し歩んできたこの20年間を振り返り、そしてこれからの森・川・人の20年間についてお伝えします。

森の姿とは違うものでした。開始から20年目の1997年、知床にもともとある多様で豊かな生態系を復元する取り組みを本格的に進めていく方向へと舵かじを切ったのです。

新たな展開へ

1997年

森林再生

森

約 860ha

第1区画 第2区画 第3区画 第4区画 第5区画

川

人

生物相復元

運動地公開

知床半島

● この地図は、国土地理院の基盤地図情
用しています。
ウベツ川」と表記していますが、運動では「岩
尾別川」を使用してきたため、今後も漢字
表記を使用します。

100 平方メートル運動は、開拓
跡地（約 860ha）に、かつてあつ
た本来の森と生物の営みを取り戻す
森づくりを進めています。

そして、この森づくりは、全国から
寄せられた寄付とボランティアの皆さ
んの協力を得て実現しています。

●この地図は、国土地理院の基盤地図情報・数値標高モデル（10mメッシュ）を使用しています。
なお、現在の国土地理院地図では「イワウベツ川」と表記していますが、運動では「岩尾別川」を使用してきました。今後も漢字表記を使用します。





森づくりの1年間

5月、知床に春が訪れます。冬の間に降り積もった雪は徐々に無くなり、半年ぶりに見る土の上には草花が顔を出し始めます。多くの木々は芽吹きを迎え、緑の中にエゾヤマザクラが花を咲かせます。そして、長い冬を乗り越えたエゾシカや冬眠から目覚めたヒグマがようやく青い草にありつけるのもこの頃です。

春を待ちわびているのは、自然の中の植物や生き物だけではありません。100平方メートル運動地での森づくりの1年が始まるのもこの季節です。その手始めは苗畑作業です。雪が解け、まだ木々の葉が開く前のこの時が、苗木の根を丈夫に作るための「床替え」に最も適した時期なのです。このわずかな時期を逃さぬよう3月が終わる頃から雪解けの状況を横目で見つつ段取りを組み、春の始まりとともに大小の苗木の移植や床替えなど苗畑での作業を一気に進めます。

そして、日に日に新緑が広がる6月になると、今度は防鹿柵の設置や補修、樹皮保護ネット巻き、各種の調査などに

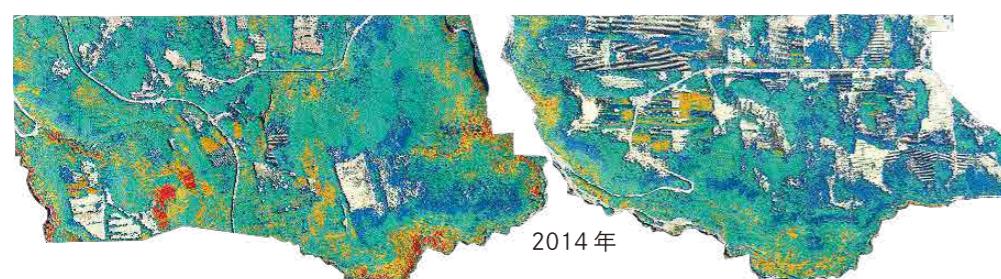
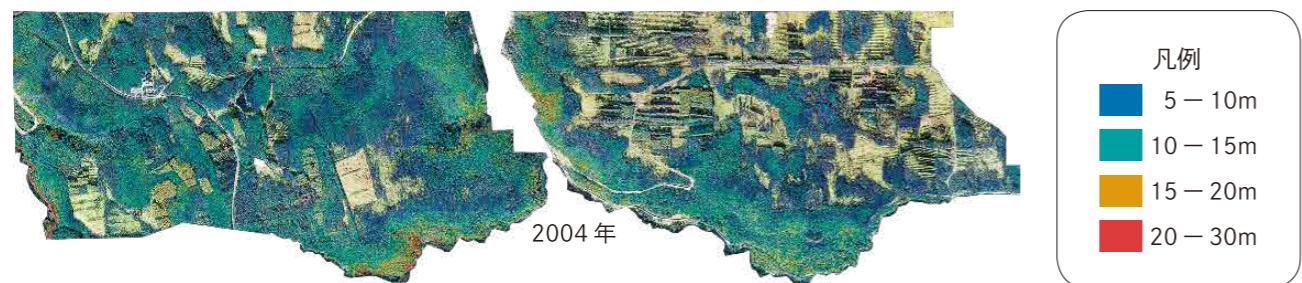
本格的な森づくりのスタート時点から、大きな壁として立ちはだかったのがエゾシカの問題です。エゾシカは、1980年代から知床半島の広い範囲で増加の一途をたどり、1990年代後半には、多くの広葉樹がシカに枝葉や樹皮を食べられ、やがて枯れていくという状況でした。そのような中、最初の森づくり作業の一つが、シカを防ぐ「防鹿柵」の設置でした。この頃はまだ防鹿柵についての知識はほとんどなく、最初は身近にある刺鉄線で柵を囲みましたが、すぐにシカに侵入されました。試行錯誤の結果、牧畜用の金網フェンスや木板を用いて囲うようになり、現在では大小合わせて19基の柵が多く木々を守っています。面積にすると、約860ヘクタールの運動地の中のわずか16ヘクタールしかありませんが、それぞれの柵の中では、その年月の分だけ木々が成長しています。

実は、苗木を育てる苗畑も、ほとんどどの苗木の植え込み先も防鹿柵の中です。この20年間は、柵の中で森づくりを進めたと言つても過言ではありません。しかし当然ながら柵の維持や将来的な改修のコストを考えると柵に頼り続けることも限界があります。現在、シカ対策に費やした20年間の知見や試行は少しずつ実を結び、新しい展開が見え始めています。

エゾシカ対策の日々



○100平方メートル運動地 森林樹高の変化(2004~2014年)



* 国際航業株式会社提供の航空測量データを使用

二次林やアカエゾマツ造林地は、5~15mの樹高となり概ね成長しています。また、開拓当時に植林されたカラマツ造林地は、15~30mの樹高になりました。しかし、強風が吹く気象条件の厳しいところは、10年を経ても木が育たず、未立木地のままとなっています。

追われる日々が続きます。もちろんその間も気温や雨の降り具合を見て苗畑に通い、苗木を育てるために欠かすことのできない水撒きや草取りを行います。知床の夏は駆け足で過ぎていきます。9月中頃には知床連山の峰々は白くなり、山の黄葉もしだいに麓へと降り始めます。そんな秋の訪れとともに、苗木を植えるのに適した秋が巡ってきます。春に比べ、多少期間の長いこの頃が植樹の最盛期となり、この20年の間に苗畑で育てた大小の苗木約1万本を植樹祭の参加者やボランティアの皆さん之力を借りて運動地の各所へと植え込みます。11月を過ぎるともう雪の季節です。年が明け、積雪が1メートルを超えるようになる頃、今度は各地の防鹿柵の見回りや夏の間にやり残した樹皮保護ネットの補修を進め、そしてまた、森づくりの1年は次の春を迎えます。

かれこれ十数年間、このような1年を続けています。しかし、その全ては手探りの中、始まりました。



かつてあつた森を復元するためには

新たな始まり

これまでの森づくりの20年間の中で大きな転機がありました。それは、2005年の世界自然遺産登録を契機に、100平方メートル運動地を含む知床国立公園内とその周辺で、植生の回復を目的としたエゾシカの個体数調整（※）が始まったことです。

当初運動では、増加したシカに対して、捕獲などの人為的な調整は行わない方針としていました。しかし、想像を超えるシカの増加とそれに伴う影響から、2007年には個体数調整も止む無し、と方針を変更したのです。

以降、知床半島の各所でシカの捕獲が継続的に実施されており、ある時点からは運動地でもシカの姿を見かけることが少なくなりました。そ

して、防鹿柵のない場所でも、今までは目にすることのなかった小さな木々や草花がその背を伸ばす姿が見られるようになっています。

森づくり開始から20年を経て、シカという大きな壁の克服に「筋の光が差し始めています。ようやく本来の森づくりのスタート地点に立ち戻った

のかもしれません。ただ、20年前と違るのは、これまでの試行錯誤から得た知見と実績があることです。

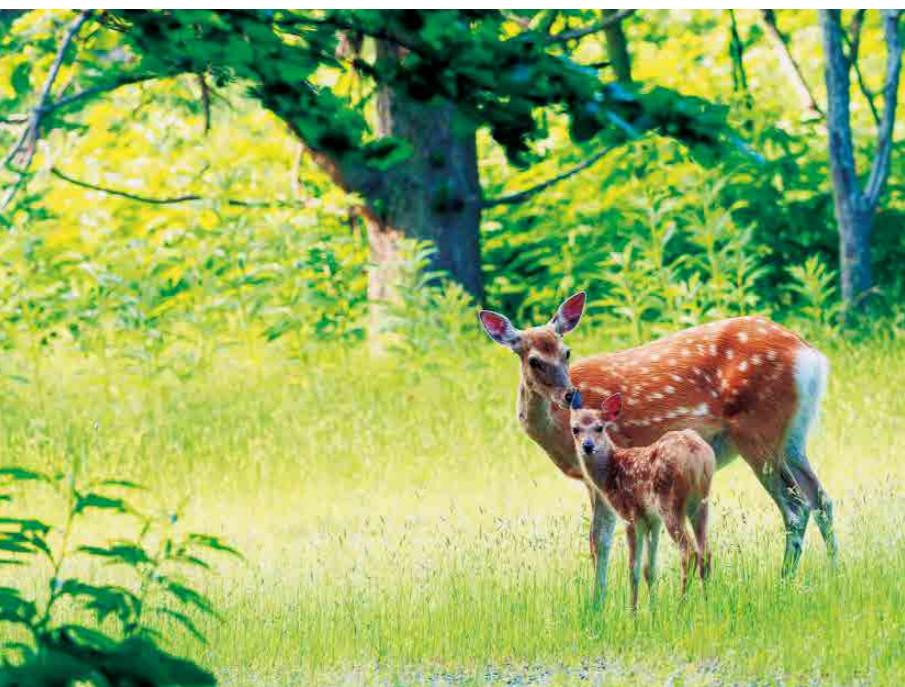
例えば苗畑では、運動地内の広葉樹から取った種を育て、生まれも育ちも運動地という苗木が、たくさんあります。それらの多くは、高さ2~3mにまで成長し中型の苗木となっています。シカが減った今、これらの中型苗を樹皮保護ネットを巻かずにしています。2016年から行っている試験的な植樹では、「部の苗木はシカに樹皮を食べられたものの、その被害は想像していたほど大きなものではありませんでした。

知床の森づくりは今、新たな始まりを迎えています。

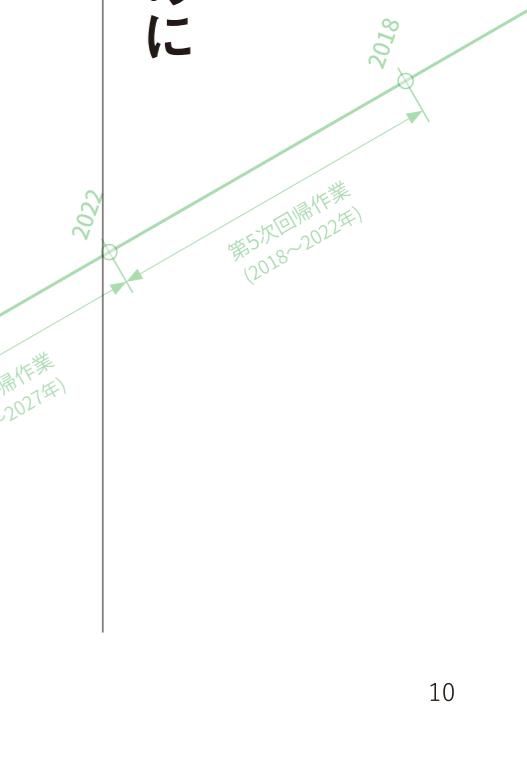


●エゾエンゴサク。シカが少なくなり、再び見られるようになりました。

※個体数調整：シカの数を適正な生息数にするため間引くこと。知床では主に環境省や林野庁が主体となって実施。



©Yoshihiro Umemura



「造林地」の樹種多様化及び「未立木地」の森林化を目指した森づくりを進める

ササ地に森を立ち上げる

ササ対策を進める計画を立てています。

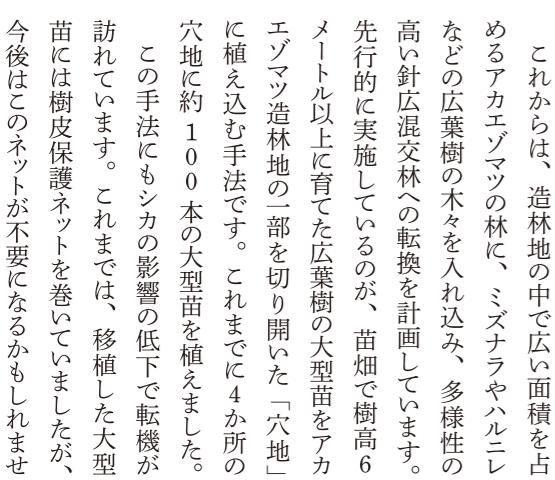
そのひとつが、バックホウなどの重機を使ってササを地中から掻き起こし、自然の種子

シカの影響の低下がみられる今、次なる壁は「ササ」との闘いです。運動地に約33ヘクタールある未立木地（木の生えていない場所）の多くはササや牧草で覆われており、木々の種が発芽しても上が覆われているため簡単に成長できず、そのままではなかなか森に戻ることはできません。未立木地を森林化するために、これまで着手できなかった

●バックホウによるササ掻き起し

運ばれてきた様々な木々の種が芽を出し、その小さな木々は、頭上を覆われることもなく成長していく、というイメージを描いています。

「重機」と「森づくり」は相反するイメージかもしれません。しかし、この手法を用いることで、自然の力を活かしつつ、より早く広い面積で森を立ち上げることができる考えています。



今後はこのネットが必要になるかもしれません。苗には樹皮保護ネットを巻いていましたが、

アカエゾマツ造林地を多様性の高い森へ

も、穴地に自然に木々が生え、シカに食べられることなく成長していくかもしれません。

そこではアカエゾマツがぐるりと穴地を囲む「防風林」として小さな木々の成長を手助けしてくれるとして期待しています。

成績がはつきりと見えるのは、5年後10年後、あるいはもっと先になります。木々が何世代も更新し森が形成される長い過程を見守つていこうと思います。

これからは、造林地の中で広い面積を占

めるアカエゾマツの林に、ミズナラやハルニレなどの広葉樹の木々を入れ込み、多様性の高い針広混交林への転換を計画しています。

先行的に実施しているのが、苗畑で樹高6メートル以上に育てた広葉樹の大型苗をアカエゾマツ造林地の一部を切り開いた「穴地」に植え込む手法です。これまでに4か所の穴地に約100本の大型苗を植えました。この手法にもシカの影響の低下で転機が訪れています。これまで、移植した大型



11



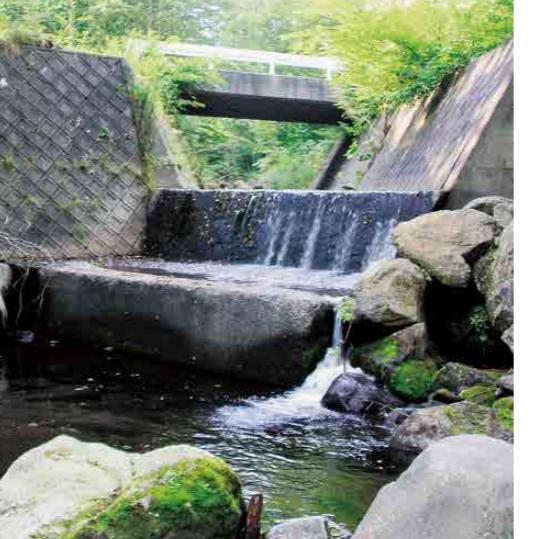
命あふれる豊かな川を目指して

河川とその周辺に生息する生き物の営みを再生する「川づくり」を進める

川づくりへの挑戦

川は、生息する魚だけではなく、その魚をエサとするシマフクロウやオジロワシなど多くの生き物にとって重要な環境です。2011年から岩尾別川で魚の生息や産卵環境の改善を目的に川づくりを進めていますが、そこには、根本的な障壁があります。

それは川の「勾配」です。岩尾別川は、知床連山を源として一気に海まで下る勾配



●改修候補の河川工作物。ここに手作り魚道の設置を検討している。

の急な河川です。例えば、ひとたび大雨が

降ると増水が発生し、一見動くはずがなさそうな大岩も流され、水が引くと河原の風景が一変していることさえあります。専門家によると、岩尾別川ほど急勾配な環境で川づくりに取り組むことは、全国を見ても他に例がないそうです。

川づくりは、コンクリートで護岸をするわけではありません。厳しい流れは常にあるものとして、それを活かした自然の流路の形成や手作りの魚道など、試行錯誤を重ねながら進めていく計画です。また、それらの作業は、地域の方やボランティアの皆さんが継続的に関わっていく場としても活かしていきたいと考えています。厳しい環境の中、前例のない取り組みが続きますが、自然のメカニズムにさからうことなく、岩尾別川に本来あった環境の復元を進めていきます。

希少鳥類のためにできること

また、シマフクロウやオジロワシなどの鳥類には回復の兆しが少しずつ見られ始めています。しかし、森づくりを進める一方で、それが以上にシマフクロウやオジロワシなどの生息に重要な河畔の大木の多くが、シカの影響で失われてしまっているのが現状です。将来、これらの鳥が暮らす森を育てるため、森の回復状況を把握していくとともに、引き続

き樹皮保護ネットなどによる大木の保護を

シカの個体数調整が続けられた結果、森の生息範囲は、運動地の中だけで完結するものではありません。隣接する国有林を含め、所管する森林管理局やそれぞれの研究者との連携を図り、広く知床半島を範囲としてそれぞれの鳥の安定的な環境の維持に努めたいと考えています。

100平方メートル運動が取り組む生物相復元

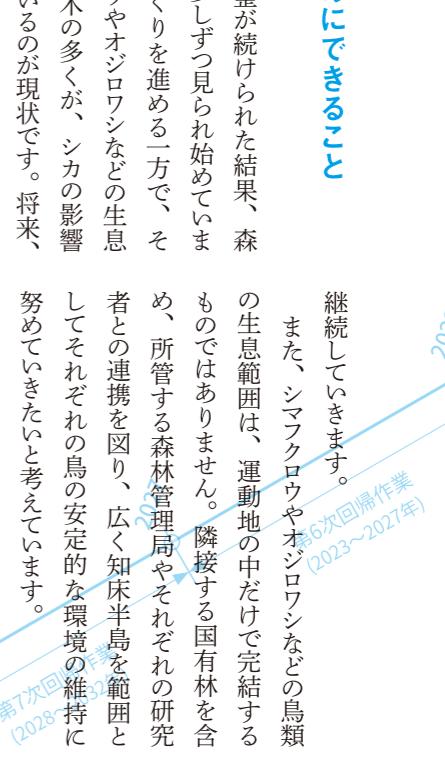
生態系の循環を取り戻すといつこと

知床博物館館長 村上隆広

100平方メートル運動の森・トラストでは、復元可能性を検討する種としてオオカミやカワウソを挙げてきました。いずれもかつて北海道各地に生息したのですが、すでに絶滅した種です。オオカミは家畜被害防止のために捕獲が奨励され、カワウソは毛皮目的の乱獲で激減しました。このうちカワウソについてはダイキン工業株式会社様からの寄付金をもとに、2011年から5年間で再導入の可能性を探る調査を行ってきました。その結果、カワウソは流れのゆるい川や湖、海岸を好み、急峻な知床半島部の河川はあまり好まないことがわかりました。また、北海道にいたカワウソとロシア極東のカワウソとの遺伝的関係を調べましたが、比較にはさらに解析が必要とわかりました。オオカミについては、まだ資料調査の段階です。そして、再導入の検討をしてきて感じたのは、失ってしまった生態系の循環を取り戻すことの大変さです。オオカミもカワウソも絶滅する前は、それぞれ森林と河川の生態系の中で、最上位の捕食者であったはずです。多くの生き物たち



がオオカミやカワウソを支えていたでしょうし、これら2種が生態系の中で何らかの役割を果たしていたことでしょう。たとえば、オオカミは群れでシカを襲つて増加を抑制していたのかもしれません。カワウソは河川の魚だけでなくカエルやサンショウウオをたくさん食べていたかもしれませんし、沿岸で甲殻類に依存して暮らしていたかもしれません。しかし、今の知床にオオカミやカワウソを支えられるだけの環境があるのか、2種が知床の今の生態系にどのように作用するかはわかりません。社会的な合意形成にも多くの時間がかかることでしょう。十分な調査の上に慎重な判断が求められます。その一方で、2種が十分な密度で生息していた環境を取り戻すことは、100平方メートル運動の森・トラストのめざすゴールであることは間違いないありません。まずは彼らの生息できるレベルの環境へと改善しつつ、2種の再導入の可能性をじっくりと検討してゆくことが大切ではないでしょうか。





運動地の森を次世代へ

運動の成果や取り組みを伝えるため、植生や野生動物に配慮した運動地の公開と情報発信を進める

「しれとこの森交流事業」と「森づくりの道」

いほど嬉しいものでした。同じように、40年近く続いている自然教室には、初期の頃の参加者の子どもたちがすでに何人も参加するようにもなっています。

先日、嬉しい知らせがありました。十数年前の知床自然教室でリーダーを担当した当時大学生だった女性からの久々の連絡で、自分の子どもが小学校4年生になつたのでよいよ自然教室に参加させたいという話でした。彼女が自然教室に関わったのはその時だけのはずですが、時を経てその経験を我が子にも思つてくれたことは言葉にできな



年前の知床自然と100平方メートル運動を次世代に残し、そして引き継いでいくことが私たちの役割です。そんな思いは運動地を歩く「しれとこの森づくりの道」に託しています。この公開コースは、ご寄付をいただいた皆さんに運動地や森づくりの現状をお伝えする場所であるとともに、運動の名前や存在を知らない方にも、この道を歩いたことをきっかけに運動のことを記憶の隅に留めていただければ、それもひとつの成果だと考えています。

また、この道には、知床に開拓の歴史があつたことを後世に残すという役割があります。道沿いには当時の家屋が残されていて、茶わんや自転車などが今もあり、開拓地はその大役にふさわしいと思う。なぜなら運動地の自然は、人によって再生された歴史と、感動を呼ぶ豊かさを両方持つだから。

「森づくりの道」への想い

知床財團事務局次長 寺山 元

「どこか歩くところない？」

自然センターでよく海外の方から聞かれる質問だ。ヒグマなどのリスクに向き合いつつ、一步奥を目指す旅人が増えてきたように思う。運動地を歩く道があることを伝え、見どころや注意事項、歴史などを記したマップを手渡す。「森づくりの道」へ彼らを送り出すとき、私は少し不安だが、とても誇らしい気持ちになる。

運動は観光開発の抑止から始まつたため、運動地の観光的な利用はタブーであり、自然教室やボランティアなどの機会に限定的に公開してきた。そんな経緯を踏まえ、慎重な検討の末、森づくりの道を一般公開したことは大きな転機だ。現在、公開は運動を継続し伝えるための手段として語られている。しかし、森づくり作業が十分に進んだある時、運動地を広く公開することこそ運動の「価値」だとする時代が来るのでないだろうか。

100年後を想像してみると、森は再生し、生き物たちは豊かに暮らし、その分植樹などの機会は縮小していく。森の恵みは蓄えられ、あふれ出た恵みが時に人々を潤す。もちろん、その恵みはモ

のことをききかけに運動のことを記憶の隅に留めていただければ、それもひとつの成果だと考えています。

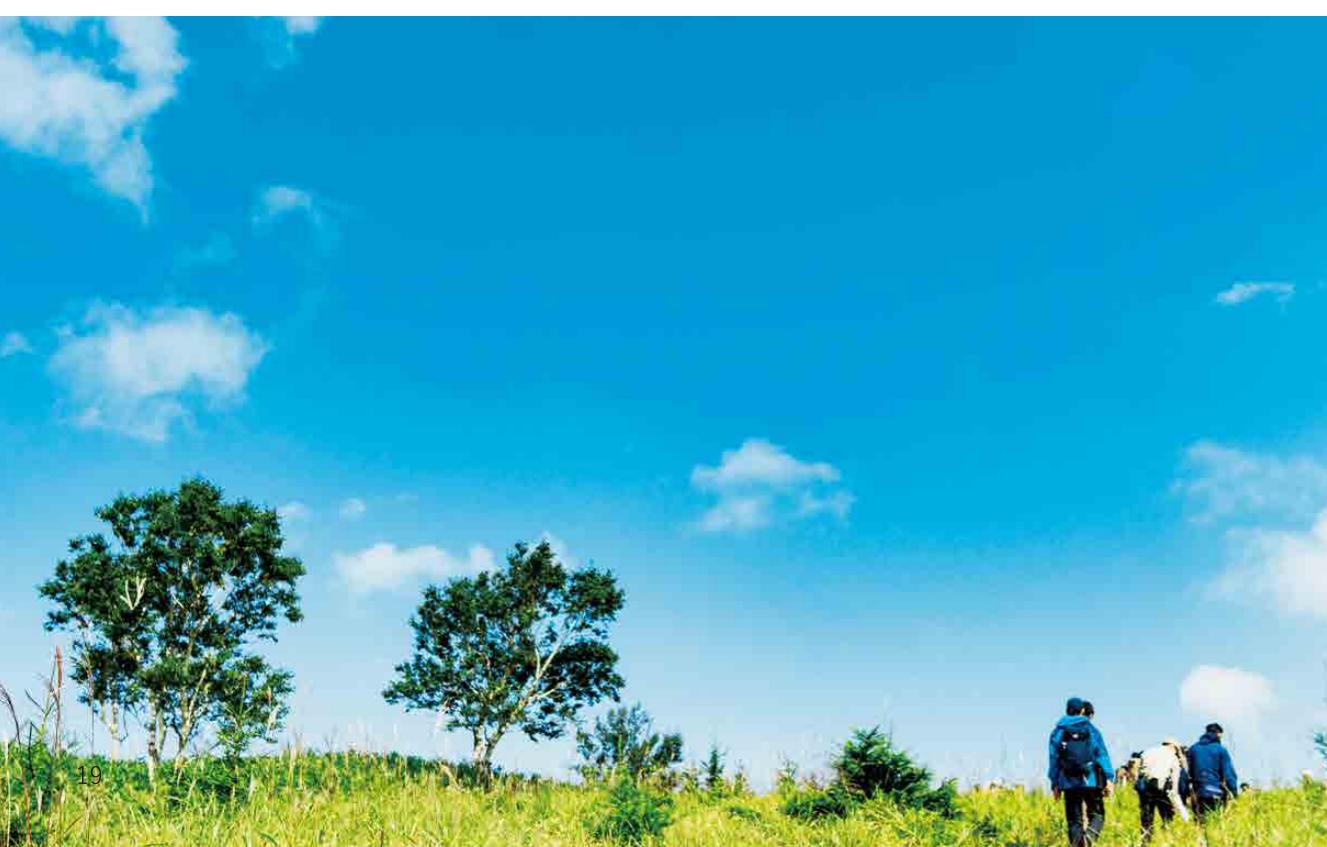
1960年代後半に知床開拓の歴史が終わり50余年、人の世代が移り変わっています。今後も100平方メートル運動は、世代を超えて知床と皆さんをつなぐ役割を果しながら、ゆっくりと着実にその歩みを進めていきます。



今後の構想のひとつとして、当時活躍した馬「鞆馬」を復活させてはどうかといふ意見も挙げられています。その馬は決して観光用ではなく、開拓当時と同様に人とともに働く馬になつてほしいと語られています。例えば伐採木を引き出す作業の担い手になり、また、放牧することでササの成長を抑制しササ対策でも活躍するイメージです。実際に馬を飼うとなれば、その命を預かることになり、覚悟も必要ですが、いた皆さんに運動地や森づくりの現状をお伝えする場所であるとともに、運動の名前や存在を知らない方にも、この道を歩いたことをきっかけに運動のことを記憶の隅に留めていただければ、それもひとつの成果だと考えています。

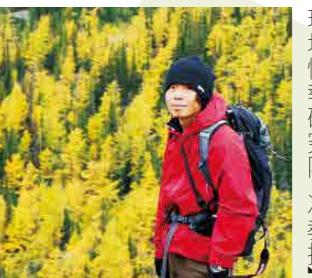
第6次回帰作業
(2023～2027年)

2022
第5次回帰作業
(2018～2022年)
2018



森林再生 専門委員会 からのメッセージ

森づくりの計画は、動植物の専門家や地元の有識者で構成される森林再生専門委員会議で議論されています。「今後20年、運動で実現してほしいこと」を各委員に伺いました。



【横浜国立大学
環境情報研究院・准教授】

これからの20年間、運動により樹種多様な森林が創出され、そこでは自然の森林で生じる営みが再生されつつある姿を実感できるように。いち研究者として専門委員として深く携わっていきたいと思います。



【星の時間
ネイチャーガイド
知床自然保護協会
理事】

設備や道具に頼る方法ではなく、人と動物の行動をうまく利用した、より自然な管理が続ければ良いと思います。知床だからかなう夢ではなく、思いがあればどこでもかなう夢の前例になることを期待します。



【100平方メートル運動推進本部副会長
北のアルプ美術館館長】

知床を原生の森へ、と始まったこの運動も20年が過ぎた。現場では自然の猛威に負けずとも木を植えてきた。そして、この歳月は過酷な知床の自然の扉が、漸く少し開いた時間でもあった。

200年後神々が宿る原生の森を蘇らせるために、これからも運動の森づくりを見守り続けたい。

今後20年、運動で実現して欲しいこと

森 章

【岩手大学名誉教授】



鬱蒼とした森の古木から突然飛び出すシマフクロウ。ナラの巨木が大量のドングリを撒き、その下ではヒグマやシカそしてリス達が見上げ、川ではカワウソがジャンプ。そんな森がいつしか戻ることを願い、まずはその足がかりの森作りが着実に続きますように。

綾野 雄次

【北海道立総合研究機構
環境科学研究中心
研究主幹】



今後20年の柱は「防鹿柵に頼らない森づくり」と「カワウソも生きできる川づくり」になると思います。この素晴らしい自然を後世に残していくのと共に、運動のプロセスをしっかりと記録し知床から世界に発信ていきましょう。

山崎 猛

【北海道大学・北方生物圏
フィールド科学センター・教授】



森はゆっくり、時に激しく動きます。この自然のダイナミズムを理解し、寄り添うことができて初めて、我々の森づくりも本来の知床の森に近づくことができるのだと思います。

開拓から今日までの自然との関わりを振り返りながら、さあ森に出かけましょう。

100平方メートル運動の可能性

森林再生専門委員会議 座長 石川 幸男（弘前大学白神自然環境研究所教授）

これまでの森づくりは、針広混交林を造成するという目標のもと、従来の林業において手法を試み、様々な知識が蓄積されてきました。苗畑では広葉樹の苗を種から育てて葉樹に用いました。エゾシカが高密度に生息した時期には、防鹿柵を設置したり広葉樹に樹皮保護ネットを巻くなどして、エゾシカの影響から森を守りました。また、岩尾別台地特有の強風から幼木を守るために、防風柵を設置して木の成長を助けました。その結果、徐々にササ地に木が育ちはじめ、森林は増加しつつあります。今後20年間も森づくりは着実に進展していくはずです。

次に、野生生物を含めた生態系の再生は、オジロワシを含む希少鳥類の生息環境を作ることや、減少したサクラマスの復元に取り組みました。動物の生活の場として重要な河川環境の改善は、ダイキン工業様のご協力もいただいて取り組みが進んでいます。森林再生専門委員会議では、生物

相の復元種候補としてカワウソやオオカミも検討しています。このように壮大な夢を持つことは非常に重要だと思います。森づくりの現場での以上のような取り組みを次世代に伝え、社会に還元する意味で、運動地公開は今後より重要性が増します。訓練された森づくりの道」が設けてくるはずです。「知床自然教室」「森の集い（植樹祭）」と「森づくりワークキャンプ」は運動参加者の交流の場として従来から整っています。また、運動地内を歩けるトレイルコースとして「森づくりの道」が設置されました。このコースは、運動参加者以外の一般来訪者の方にも広く利用され、開拓の歴史や自然の価値を感じる場として機能しています。このように、それとこの100平方メートル運動は、森を創ることそのものの価値に加えて、文化的な価値も非常に高いと言えます。

運動開始から40年間、全国の皆様から

の協力を得て、私たちは様々なノウハウを蓄積して参りました。これから重要なこと

は、この北の地から、日本社会全体に向かって、自然の摂理にしたがつて活動することの意義をどうやって訴えかけるかだと思います。謙虚な姿勢で、原生自然の再生に長い年月をかけて取り組む姿を伝えることは、目先のテクノロジーばかりに心を奪われがちな現代社会に、自然の「員」として生きることの大切さを気づかせる力を持つ

ます。謙虚な姿勢で、原生自然の再生に長い年月をかけて取り組む姿を伝えることは、目先のテクノロジーばかりに心を奪われがちな現代社会に、自然の「員」として生きることの大切さを気づかせる力を持つ

が不可欠です。是非、関心を持ち続けていただき、これからもご意見を賜れば幸いです。

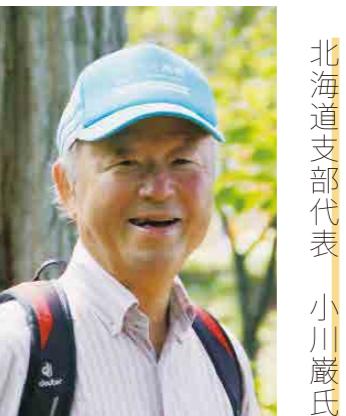


しれとこ 100 平方メートル運動推進北海道支部が結成されました

北海道支部設立を機に40年前のあの熱気を

北海道内在住の運動参加者を中心として、今年2月24日北海道大学総合博物館に約120名の出席者のもと、北海道支部が結成されました。昭和54年10月に関東支部（1都6県）が、昭和55年7月に関西支部（2府4県）が発足したのに次いで、全国3番目に誕生したことになります。各支部から今後の活動や抱負について語つていただきました。

北海道支部役員（敬称略）



北海道支部代表 小川 嶽氏

知床へは、二、三十回行っていると思う。だからと言つて特別深い付き合いがあった訳ではない。むしろ疎遠だったよう思う。たしかに100平方メートル運動には発足直後から関心をもつて、夫婦と子ども名義で寄付をしたものそのだけの関係に過ぎない。

私は英國のナショナルトラスト（NT）に若い頃から興味があつて、彼の地のプロパティは100ヶ所以上訪れている。それが高じてNTの終身会員になった地位である。たゞ本場イギリスと知床では、NTといつても似て非なるものが、員制なのかどうかが大きな分かれ目になるだろう。

イギリスのNTは会員制であり、会費は毎年払う。300万人超がNTを支えている。対する知床は寄付という形をとっている。一度払うだけでその

後のつながりに結びつかないという弱点があると思っていた。

けれども寄付制も捨てたものではな

いと感じ始めた。返礼品こそないが、思いついた時に不定期に寄付をする新

しい文化を築けるかも知れないからだ。

現在の活動の原点は100平方メー

トル運動なのだと繰り返し強調して、

40年前の熱気を蘇らせられないのか。

そのため地元北海道で草の根に徹し

た活動を展開するはどうすべきか、荷は重くも楽しみだ。

代表	小川 嶽	(札幌市)	100 平方メートル運動が始 まって 40 年。森を育てる運動が 始まって 20 年です。
副代表	岡崎 一智	(札幌市)	最近 10 年間の関西からの運動 参加者数は毎年 100 人前後、 関東は 250 人前後で推移して います。
幹事	伊吾田 宏正	(江別市)	森を育てるといった地味な運動 なのでマスコミが報じる機会が少な い分を関西、関東そして新しく できた北海道支部は、身近な人 たちに広報することで賛同者を 増やしていくましょう。
副代表	加藤 誠	(札幌市)	その後の展開においても斜里町・ 知床財団には、知床の自然環境の 未来のために、守りではない攻めの 姿勢を貫いていただきたいと思いま なります。
幹事	深沢 博	(札幌市)	運動 100 周年という未知なる ステージを見据えた時、「土地の買 い上げによる自然環境保全」と いうインパクトのある運動を体験・ 体感していない方が、運動を引き 継ぎ、昭和・平成の時代を知ら ない全国の国民が支援することに なります。
幹事	川人 正善	(平取町)	
幹事	榎 房子	(札幌市)	
幹事	植木 玲一	(札幌市)	
幹事	平野 青路	(札幌市)	
幹事	桐田 雅則	(札幌市)	
幹事	福沢 紀子	(札幌市)	
幹事	池田 研一	(札幌市)	
幹事	中野 直子	(札幌市)	
幹事	阿部廣太郎	(札幌市)	
幹事	佐藤 清秀	(札幌市)	
幹事	平井 文雄	(札幌市)	
幹事	関根 郁雄	(札幌市)	

北海道支部事務局／関根宅
札幌市西区八軒10条東3丁目
1ノ15ノ610号
電話 090-4873-0151

関西支部世話人代表

小田忠文氏



運動 100 周年という未知なるステージを見据えた時、「土地の買い上げによる自然環境保全」というインパクトのある運動を体験・体感していない方が、運動を引き継ぎ、昭和・平成の時代を知らない全国の国民が支援することになります。

今後の展開においても斜里町・知床財団には、知床の自然環境の未来のために、守りではない攻めの姿勢を貫いていただきたいと思います。

関東支部支部長

税所功一氏



「私たちとは、知床の自然からくさんのが経ちました。はじめの2年間は、「森の番人」に就いて仕事を学びました。森の番人の膨大な知識と卓越した職人技が、運動地の森づくりを支えてきたのは周知の通りです。この偉大な先達から、仕事を学べる喜びと技術を継承する重圧を感じながら、時はあつという間に過ぎました。森の番人は2015年に勇退されましたが、一緒にできた僅かな期間で私が習得できることは多くはありませんでした。が、知床の森づくりの代名詞でもある広葉樹の大型苗の移植は、多くのボランティアさんの協力を得て、現在も継続できています。

現代社会が忘れてしまった「人と自然の交歓」が運動地の森では今も育まれて

この原稿を書いている3月中旬、窓の外の雪は日に日に高を減らし、所々ではササが頭をもたげだしています。この冬は例年にならずで終わりの様相を見せ始め、辺りの景色は4月の中頃と言つてもし支えないほどです。このまま季節が進んだ場合、例年5月中頃からのスタートしている苗畑作業は、どれだけ前倒しになるのだろうと思いつらす日々が続いています。

100平方メートル運動の話をする時、決まって「何百年先」といった言葉を口にしています。しかし、そうは言つるもの、私たちは実際にその時を見届けることはできません。人にとっては長い時間も、森や自然にとってはおそらくわずかな時間でしかありません。運動開始から40年、確実に

人の歩みも進んでいます。私自身も小学生の時分に知床自然教室に参加し30数年、その後森づくりに携わり10数年が経ちました。その間に子どもも産まれ自分や家族、そして森の変化を見ていると、もしかしたら100年ぐらいはそんなに長い時間ではないのかもしれない、時間のどちら方が変わり始めてもきっとます。

世代を超えて関わり続けること、それが人のできる最も大きな力なのかも知れません。知床の森が守られ、私たちがここにいるのも、運動を続けてきた諸先輩の方、何より運動参加者やボランティアなど多くの方々がいたからです。これからもひとつひとつを積み重ね、人の輪を広げていく、それを続けていくことが何百年先の森につながるはずだと思っています。

森づくりの現場業務を担当して5年が経ちました。はじめの2年間は、「森の番人」に就いて仕事を学びました。森の番人の膨大な知識と卓越した職人技が、運動地の森づくりを支えてきたのは周知の通りです。

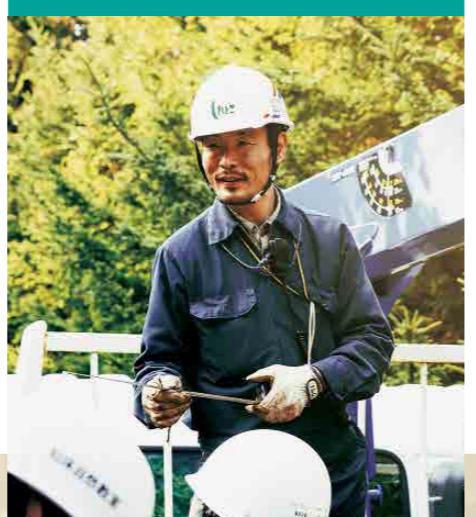
この偉大な先達から、仕事を学べる喜びと技術を継承する重圧を感じながら、時はあつという間に過ぎました。森の番人は2015年に勇退されました。ご一緒できた僅かな期間で私が習得できることは多くはありませんでした。が、知床の森づくりの代名詞でもある広葉樹の大型苗の移植は、多くのボランティアさんの協力を得て、現在も継続できています。

広葉樹を植えて育てるという難題をクリアしたこの手法は、一般的な植樹に比べてたいへんな労力がかかりります。しかし、この作業を通して私たちは、失った自然の大きさを知り、人の力が微力であることを痛感しつつも、人が自然のためにできることを真剣に考えることができるのです。

「私たちとは、知床の自然からくさんのが経ちました。はじめの2年間は、「森の番人」に就いて仕事を学びました。森の番人の膨大な知識と卓越した職人技が、運動地の森づくりを支えてきたのは周知の通りです。この偉大な先達から、仕事を学べる喜びと技術を継承する重圧を感じながら、時はあつという間に過ぎました。森の番人は2015年に勇退されました。ご一緒できた僅かな期間で私が習得できることは多くはありませんでした。が、知床の森づくりの代名詞でもある広葉樹の大型苗の移植は、多くのボランティアさんの協力を得て、現在も継続できています。

広葉樹を植えて育てるという難題をクリアしたこの手法は、一般的な植樹に比べてたいへんな労力がかかりります。しかし、この作業を通して私たちは、失った自然の大きさを知り、人の力が微力であることを痛感しつつも、人が自然のためにできることを真剣に考え

知床財団
自然復元係
草野 雄二



知床財団
自然復元係
松林 良太

知床で人ができること

エゾシカが生息する知床の森の中で

います。

森づくりの現場から

森づくりを通して学んだこと

森づくりの現場業務を担当して5年が経ちました。

はじめの2年間は、「森の番人」に就いて仕事を学びました。森の番人の膨大な知識と卓越した職人技が、運動地の森づくりを支えてきたのは周知の通りです。

この偉大な先達から、仕事を学べる喜びと技術を継承する重圧を感じながら、時はあつという間に過ぎました。森の番人は2015年に勇退されました。ご一緒できた僅かな期間で私が習得できることは多くはありませんでした。が、知床の森づくりの代名詞でもある広葉樹の大型苗の移植は、多くのボランティアさんの協力を得て、現在も継続できています。

広葉樹を植えて育てるという難題をクリアしたこの手法は、一般的な植樹に比べてたいへんな労力がかかりります。

しかし、この作業を通して私たちは、失った自然の大きさを知り、人の力が

微力であることを痛感しつつも、人が自然のためにできることを真剣に考え

運動参加者からの message

m e s s a g e



ご寄付いたいた皆様からのメッセージの一覧をご紹介させていただきます。

返礼品目当てのふるさと納税よりも心うれしい寄付です。3回目ですが、年金生活なので些少です。

(茨城県 男性)

このトラスト運動が始まった時以来応援しています。主人が昨年他界しましたので今後私が引きつぎます。

(北海道 女性)

しがとこの森通信ありがとうございます。100平方メートル運動の初めに参加しましたが40周年なのですね。自然を守つて下さって感謝。これからもまた参加していきます。

(宮城県 女性)

いつの日か知床の斜里町の地へ、2人での訪問も考える次第。かわうそ・サクラマスの次報にも期待します。

(静岡県 60代男性)

40年近く前に同僚の先生がしがとこのトラスト運動について話を聞いていたことを思い出しました。北海道に行ったことのない私が「知床」はいちばん親しみのある地名です。

(東京都 70代女性)

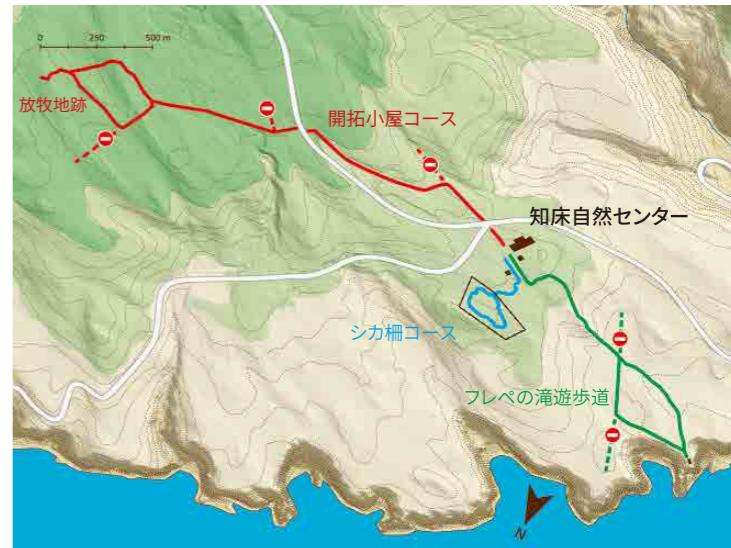
しがとこの森通信、楽しく拝読いたしました。いつも紙面から知らない事を知る喜びを感じています。皆さんまの「ご努力に乾杯!」です。

(埼玉県 男性)

先日の40周年記念行事と事前ボランティアに参加させていただきました。久しぶりの知床、楽しかったです。

(神奈川県 男性)

Shiretoko News しれとこニュース



森づくりの道 (運動地公開コース)

- 開拓小屋コース
5km 約2.5時間
- シカ柵コース
1km 20分
(冬季閉鎖)
- フレペの滝コース
2km 40分

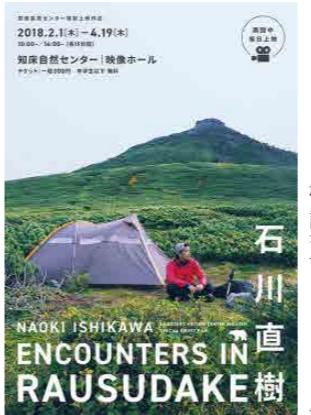
森づくりの道は、知床自然センター周辺に設置された運動地公開コースです。この度、既にあるシカ柵コースに加え、開拓小屋コースが2017年9月にオープンしました。知床自然センターを起点として、全長5kmを約2時間半で歩くことができ、既に多くの来訪者にご利用いただいています。コースは、開拓後にできた森の中を通っています。自然にできた広葉樹林とカラマツやアカエゾマツの造林地で構成された森の中に、開拓時代の遺品がそのままの形で残されています。また、コースの途中には、開拓当時の建築物を修復した「旧開拓家屋」や「開拓小屋」が当時の面影を残したまま建っています。そして、コース最奥の放牧地跡にたどり着くと、雄大な知床連山を一望することができます。

このコースの開設期間は、5月上旬～11月下旬。また、冬期は1月下旬～3月中旬に開設し、同コースをスキーやスノーシューで歩くことができます。

運動参加者の皆さまが守つた森をぜひ歩きにお越しください。

知床自然センター開館以来、「四季知床」を上映してきた映像ホールがこの度、装いも新たにリニューアルオープンしました。幅20m×高さ12mの上映スクリーンに加え、客席がゆったり座れるシートに代わるなど、より自然映像を鑑賞するに相応しい映像ホールとなりました。

また、上映作品も「四季知床」に雄大な知床連山を二望することができます。



【問い合わせ先：知床自然センター】

(電話番号：0152-24-2114)

加え、旅する写真家石川直樹さんによるショートムービー「Encounters in Rausudake」(上映時間10分)が公開されました。近年石川さんは、知床連山の最高峰羅臼岳に向かいました。本作は、その際の記録をまとめたオリジナル作品で、知床自然センターでの上映のために撮り下ろされました。ぜひ、鑑賞にお越しください。料金は、一般のお客様が300円、中学生以下が無料です。上映期間・時間については、知床自然センターまで問い合わせください。

知床の主な出来事

知床自然センターの大形映像ホールがリニューアルオープン

リニューアルオープン

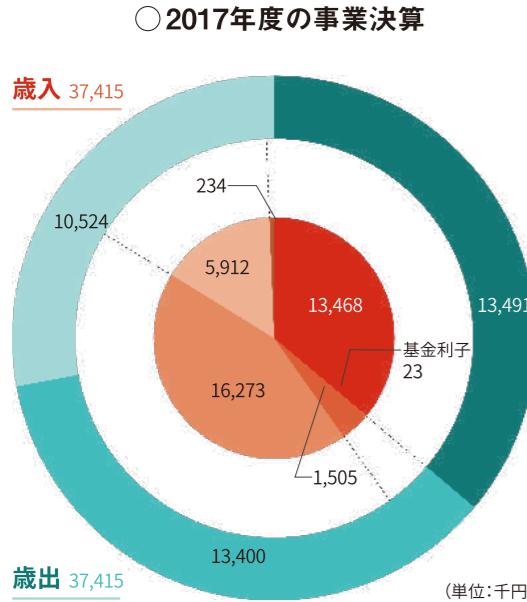
斜里町役場から



しがとこの森をいのちあふれる原生的自然に復元するため、これらも皆さんのお力添えが必要です。今後とも、知床を心の片隅に置いていただければ幸いに存じます。

会計報告

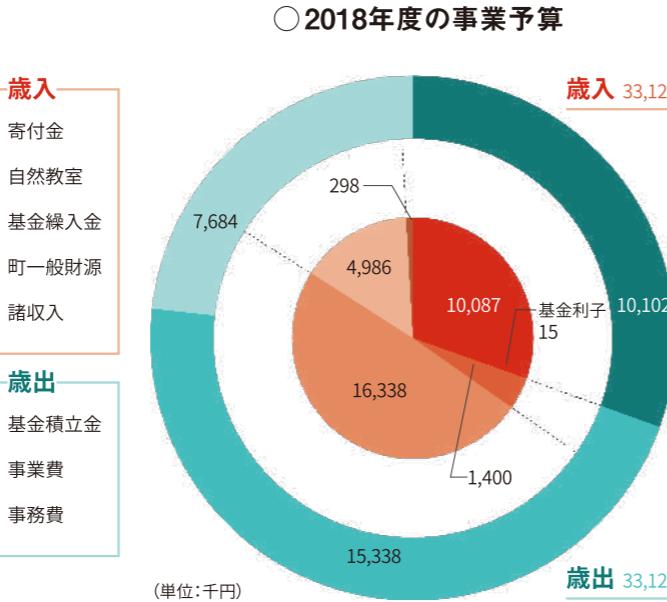
運動の活動資金は、「国立公園内森林保全基金」として斜里町が管理しており、町の一般会計と基金からの繰入金により事業を実施しています。



2017年度は、総額37,321千円を支出しました。

事業費の内訳は、森林再生業務委託費（13,400千円）が主なものです。また、事務費として森通信の作成費用や受付事務員賃金などに10,431千円を支出しました。

2017年度にいただいた寄付金（13,491千円）は、いったん運動の基金に積み立て、2018年度以降の活動資金として活用していきます。



2018年度の総事業費は、33,124千円を予定しています。

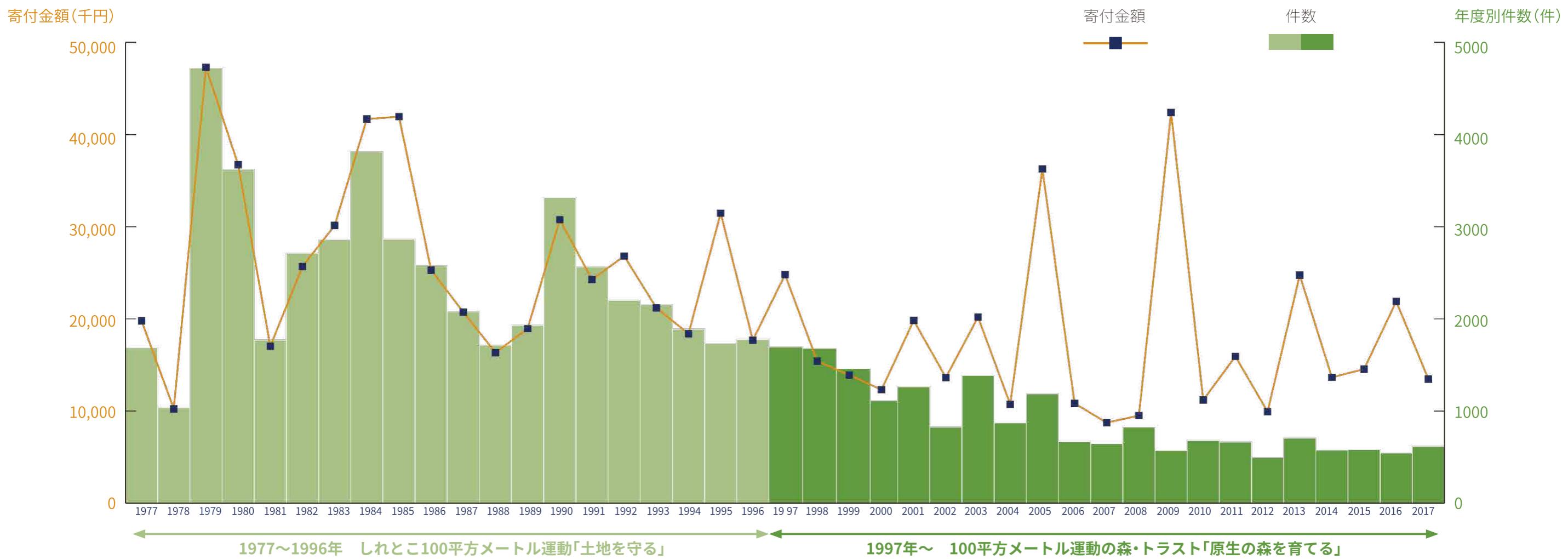
収入では、これまで積み立ててきた運動の基金から16,338千円、町の一般会計から4,986千円を繰り入れるほか、寄付金の目標額として10,087千円、その他1,713千円を見込んでいます。

支出は、森づくり作業に係る事業費15,338千円を予定しています。また、事務費として森通信印刷などの広報普及費用や受付事務員賃金などに7,684千円を支出する予定です。

(単位:千円) 2018年5月31日現在

	2016年以前	2017年	計
歳入	寄付金	873,042	13,468
	利息	69,789	23
	計	942,831	13,491
歳出	事業費	744,592	11,895
	事務費	132,794	4,377
	計	877,386	16,272
残高			62,664

○運動参加件数と寄付金の推移(1977~2017年度)



知床の森づくりには皆様の力が必要です!

森づくりボランティア&イベント参加者募集中

森づくり週末ボランティア

2018年

5/25(金)～27(日)
6/15(金)～17(日)
9/7(金)～9(日)
10/19(金)～20(土)

【活動内容】

主に苗畑作業(除草・苗木移植等)や防鹿柵の補修作業を行います。

2019年

1/19(土)～20(日)
1/26(土)～27(日)
2/9(土)～10(日)
2/16(土)～17(日)

【活動内容】

冬期森づくりの道の管理や伐採作業を行います。

森づくりワークキャンプ

2018年

【春】5/15(火)～19(土)
【秋】10/30(火)～11/3日(土)

対象:18歳以上

定員:15名以上(先着順)

参加費:16000円(宿泊費・食費・保険料等込み)

申込〆切:【秋】10/16(火)

第39回知床自然教室

2018年

7/30日(月)～8/5日(日)

対象:小学校4年生～高校3年生

定員:40名(先着順)

参加費:35000円(別途、現地までの交通費)

申込〆切:7/2(月)

第22回しれとこ森の集い(植樹祭)

2018年

10/21(日) 参加費:無料

※参加の申し込みは

斜里町役場 環境課 自然環境係まで

TEL:0152-23-3131(内線100)

FAX:0152-23-4150

イベント・ボランティア 参加申し込み・お問い合わせ

公益財団法人 知床財団
自然復元係

TEL:0152-24-2114
MAIL:info@shiretoko.or.jp



100 平方メートル運動の森・トラスト参加のお願い

知床の森づくりは、「100 平方メートル運動の森・トラスト」参加者からの毎年の寄付金によって支えられています。引き続き、あたたかいご支援をよろしくお願い致します。

■寄付金:1口5000円

参加(寄付)の方法

● 申込書に必要事項を記入の上、郵送またはファックスで斜里町役場へ送信してください。

【郵便払込】

申込書付属の払込取扱票で
払い込みください。

【現金書留】

申込書を同封の上、現金書留を
斜里町役場にお送りください。

【ホームページ】

<http://100m2.shiretoko.or.jp/>



【控除制度について】

運動への寄付金は、所得税および住民税の控除制度(ふるさと納税)の対象となります。

所得税は、課税対象額から寄付控除を受けることができます。

住民税は課税額から寄付控除を受けることができます。

控除の対象となるのは、2000円を超える寄付です。

【お問合せ】

〒099-4192 北海道斜里郡斜里町本町12番地

斜里町役場 自然環境係

TEL: 0152-23-3131(内線100)

FAX: 0152-23-4150

MAIL: 100m2@town.shari.hokkaido.jp

寄付をいただいた方に募金証書をお送りします。メッセージ
を添えて、ご家族ご友人へ贈るプレゼントにもおすすめです。